生涯学習・社会教育学研究　第26号　2001年

# 「居場所」型施設における若者の関わり方

## ―― 公的中高生施設「ゆう杉並」のエスノグラフィー ――

新　谷　周　平*

# The Commitment and Relationship of Teenagers in the 'Ibasho'-type Facilities

## ―― The Ethnography of the Public Facilities for Junior and Senior High School Students, 'Yu-Suginami' ――

**Shuhei ARAYA**

The word 'ibasho' for children and youth has been used since the late 1980 s, which represents 'a comfortable place' or 'a place where people are accepted as they are'. Especially in social education research it is defined as 'a place and relationship indispensable for children and youth', and to prepare 'ibasho' has been one of public issues. Then 'ibasho'-type facilities for children and youth were built in 1990 s. However, 'ibasho' prepared by adults is not always accepted by children and youth as their 'ibasho'.

The purpose of this paper is to make clear the commitment and relationship of teenagers in 'Yu-Suginami', the one of 'ibasho'-type facilities many and various teenagers use. I adopt ethnography as a research method. This is the way to research or the writings and texts through fieldwork, which aims to describe the culture of others.

The characteristics of teenagers' commitment and relationship I have found out through the ethnography are 'the variety of needs for out-of-school', 'the diversity of commitment' and 'the gradual commitment'.

目　次

Ⅰ　「居場所」研究の動向
Ⅱ　研究の目的と方法
Ⅲ　ゆう杉並における若者の活動と関わり方
　A．ゆう杉並の概要
　B．ダンスをする若者たち
　　－多様な関わり方とそのプロセス
　C．オフィシャルバスケのメンバー
　　－学校外への多様なニーズ
　D．個人利用者－職員を介した参加プロセス
　E．バンド活動
　　－「友だちの友だち」つながりと施設への違和感
Ⅳ　「居場所」型施設における若者の関わり方
　　－「多様な距離のとり方」と「漸次的参加」
　A．学校外への多様なニーズとやりたいことの追求
　B．「多様な距離のとり方」
　C．「漸次的参加」
Ⅴ　おわりに

＊生涯教育計画コース　博士課程１年

## Ⅰ　「居場所」研究の動向

子どもや若者の「居場所」が問題とされてきたのは，フリースクール等，不登校の子どもたちの居場所づくりをきっかけにしていると考えられる（芹沢2000）。80年代半ばに設立されたフリースクール「東京シューレ」(東京シューレ編2000）は，フリースクールの理念の第一に「居場所であること」をあげ，「身をおくところ」，「心が安心していられるところ」が「居場所」であるとする。このように「居場所」という言葉は，不登校の子どもの

居場所をきっかけにして使われるようになってきたなかで，学校制度と対立的なニュアンスを持ちつつ，「ほっとできるところ」,「ありのままの自分が受け入れられるところ」という意味を付与されてきた（住田2001a)。

その後，「居場所」が必要なのは不登校の子どもたちだけではないという認識が広がり，90年代以降，子どもや若者の「居場所」研究が，教育学（学校教育，社会教育),社会学，心理学，精神医学，建築学等さまざまな分野において行われ（藤竹編2000，田中編2001，住田ほか2001など),教育，建築関係の雑誌の特集でもしばしば取り上げられるようになった[1]。

それらの研究のなかには，いくつかの方向性が見られる。ひとつは，人びとが「居場所がない」あるいは「居場所がある」と感じる気持ちを，質問紙調査，自由記述，インタビュー等の分析により明らかにするものである（萩原1997，2001，鳥山1997，鈴木・中野2000，富永・北山2001，住田2001b など)。2つ目に，子どもや若者が，特定の場所にどう居るか，特定の場所をどのように居場所としているかを明らかにするものがある。ここには，公園を対象とした井田ほか（2001),駄菓子屋の澤田ほか（2001),小学生の道草を扱った水月ほか（2001),中高生施設を扱った松木・定行（2000),金丸ほか（2000),渡海ほか（2001）などが含まれる。3つ目は，不登校の居場所や青少年施設など大人による「居場所づくり」に関するものである（沖田1997，久田1997，佐藤1998，久田編2000，田中編2001など)。

社会教育学における子ども・若者の「居場所」研究は，その3つ目に含まれるものがほとんどである。そのなかでは，行政や住民による「居場所づくり」実践における方法論や指導者論にもとづいて，団体育成と非行対策を中心とした従来の青少年行政の方法に代わる支援方法論として「居場所づくり」が位置づけられている（久田2000，田中2001b)。久田（2000）は，「居場所」を「子どもや若者が大人になるために不可欠な条件としての空間や人間関係」(p.204）とし，それは「基本的には子どもや若者が自力でつくるものだが，…大人に期待される役割も大きい」(同）として行政と住民のパートナーシップによる居場所づくりを提言している。田中（2001a）は，「居場所」を「他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場」(p. 8）とし，その「居場所」においては，関わりをつくりだす「指導者」と若者による「参画」が必要だと述べる。

このように，社会教育学研究においては，「ほっとできるところ」,「ありのままの自分が受け入れられるところ」という「居場所」の第一義的な意味から出発して，そうした場をいかに学校とは異なる場所に作り出すことができるかという実践的な意味に発展しつつある。それは，子どもや若者を指導の対象とし，大人社会の役割へと参加させる従来の「健全育成」政策や「社会参加」政策とは異なり，子どもや若者自身のニーズにもとづいた場をつくりだそうとするものである。

しかし，その場をつくりだすときに，子どもや若者の「参画」を取り入れるとしても，大人の役割や指導者の存在を前提とせざるをえない以上，「必要な人間関係や空間」,「関わり」のあり方を誰が決めるのかという問題が生じる。子どもや若者は，大人の「居場所づくり」とは別に，自分たちでどこかに何らかの「居場所」を見出しているのではないか，そこでは大人が設定する「居場所」とは異なる関係性が生じているのではないかとも考えられるのだ。仮に大人のつくった「居場所」を利用するとしても，それは大人が設定した「関係性」をそのまま受けいれるのではなく，彼ら独自のし方で，彼らの生活世界のなかの一つの場としてそこを利用しているにすぎないであろう。そのように考えるならば，「大人が居場所をつくる方法」という次元とは別に，子どもや若者がその場をどのように「居場所」としているのか，あるいはしていないのか，という研究の次元が求められることになる。それは，上述の「居場所」研究の分類に戻れば，その3番目にあたる「居場所づくり」研究においても，第2のレベルの研究が求められるということである。

この点があいまいなままに「居場所づくり」が進められるならば，それは，「従来的な意味での『正統』で『健全』な時空間…に，彼らを捜し求め，そこにいない者たちをそのなかに誘導しようと空しい努力を続け」(本田1999，p. 7）るものとなってしまうであろう。

## Ⅱ　研究の目的と方法

したがって，本稿では，「居場所」型施設における若者の関わり方を明らかにすることを目的とする。ここで「居場所」型施設とは，若者に居場所を提供することを目的としている施設のことである。杉並区の「ゆう杉並」,佐倉市の「ヤングプラザ」,町田市の「ばあん」などは，中高生，十代の若者を主な対象とし，とくに目的がなくとも利用ができる場の提供を施設の目的のひとつにしている[2]。こうした「居場所」型施設に対して，どのような若者がそこにどのように関わり，そこを「居場所」としているのかを明らかにする。

上記の目的を達するためには，若者の目線から若者のいる場所，若者のする活動に関わらなくてはいけない。そのため本稿では，研究方法として，エスノグラフィーをとる。エスノグラフィーとは，フィールドワークの方法を用いた調査研究，またその成果としてまとめられた

文章，テキストのことであり（志水1998），それは，当事者の観点から文化を記述することを目的とするものである。研究対象は「居場所」型施設のひとつである杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」とし，1999年9月から2000年10月まで観察とインタビューを行った[3]。

## Ⅲ　ゆう杉並における若者の活動と関わり方

### A．ゆう杉並の概要

ゆう杉並は，「主たる利用者を中・高校生とする『大型児童センター』」（平成10年度事業報告）で，従来の青少年施設に比しても，多様で多数の若者の利用を得ている施設である[4]。区内41児童館における「中高生タイム」[5]の実践の上に，「建設中・高校生委員会」を通じて利用者である中高生の意見を取り入れ建設された。大人側の建設協議会は，当初プラネタリウムや暖炉，学習施設など学校にないものを想定していたが，中高生委員たちは，学校が利用できる場ではないとし，バスケのフルコートがとれる体育室や音楽活動ができる空間を提案し，それが採用された（金丸1999）。

ゆう杉並に入ると，まず受付がある。そこで職員から声をかけられ，入館票に氏名，学校名，学年を書く。利用者は原則として18歳以下または高校生以下に限られている。利用時間は午前9時から午後9時まで，自由利用は午後7時までとなっている。18歳以下の利用はすべて無料である。

施設設備は，ロビー，ホール，体育室，工芸調理室，音楽スタジオ，学習コーナー，鑑賞コーナー，集会室である。ゆう杉並の利用形態は，①自由利用，②団体による予約利用，③講座，オフィシャルチーム等プログラムへの参加の3つある[6]。ロビー，ホール，体育室は通常自由利用となっており，ロビーで飲食をしながらくつろいだり，一人や少人数で体育室でバスケやバドミントンをしたり，ホールでダンスの練習をすることができる。スタジオや午後7時以降のホール，体育室は予約利用でバンド，スポーツやダンスのグループ，学校の部活動などで利用できる。講座は，ダンス，ギター，レコーディング，お菓子づくり，陶芸等多彩で，専門の講師が呼ばれて行われる。講座は，毎月行われるが，公民館やカルチャーセンターとは異なり単発のものが多く，受講者はいつでもはじめることができ，連続で取ることも，1回で辞めることも自由である。また，継続的に活動を行いたい者は，オフィシャルチームに所属する。オフィシャルチームは，ダンス，バスケ，バドミントン等がある。

次節では，フィールドでのより詳細な観察，聞きとりから，こうした利用者たちの属性や活動のきっかけ，関わり方などに迫っていく。

### B．ダンスをする若者たち
### ―多様な関わり方とそのプロセス

#### 1．オフィシャルダンスのメンバー

(1)　ある日の練習

オフィシャルダンスのメンバーは，高校生を中心に男子4名，女子15名である。10月のこの日の練習は，午後6時からゆうホールで，出席者は9名。講師の岩崎先生は，「12月に向けて今どういう状況にきてるかわかってるの？なぜ半分いないのか？」と，出席率が悪いことを怒っている。オフィシャルダンスのメンバーたちは，部活動やアルバイトで忙しく月2回の練習にも人数が揃わない。そのこと自体が各メンバーのコミットメントが一様ではないことを表している。

講師の岩崎先生は，著名なミュージカルにも出演する「舞台女優，振りつけ師」。「ストリートの人がどうやってやっていってるかは知らない。…やっぱクラシックやってないと」という先生がここで教えるダンスはジャズが中心であり，ヒップホップやブレイクなどストリート系のダンスには距離をとっているようだ。

練習は12月のライブに向けて組みたてられ，3つのチームに分かれて曲決め，振りつけの話し合いが行われたあと，先生が振りつけをする全員ダンスの練習が行われる。最後に職員から集合がかかり，次回日程の確認，名簿，予定表の配布，予約時の注意など事務連絡がなされる。練習後には，各チームごとに自主練習日が決められ，9時の閉館までに着替えて外に出る。外に出た後もしばらく互いの学校のことなど雑談をし，職員に「早く帰んなー」と促されてそれぞれ帰路につく。

(2)　メンバーの動機とコミットメント

メンバーの女子の大半は，中3から高2である。彼女たちの多くは，ダンスをやりたいと思い，学校に貼ってあったチラシや親からゆう杉並の存在を知り，「ただでできるから」という理由でダンス講座に参加し，その後オフィシャルダンスに加入している。

**カナコ「学校で見て，友だちといつか行きたいねーっていってて，スピードの振りつけ講座に行って。…高校に入ったらダンスやろうと思ってて，習おうとしたらお金かかるからダメっていわれて。手紙が来て，お母さんが『ただだからやれば』って」**

**ミキヨ「みんなそうだよね。ただだからやるかって」**

【1999.12.18　筆者との会話】

「ただだから」という理由は，金銭的余裕の少ない中高生が部活以外に何かやりたいことをするとき，はじめ易くしていることと同時に，コミットメントの少なさも表している。彼女たちはゆう杉並以外ではダンスをしておらず，高校3年生になると，「受験のため」にオフィ

シャルダンスを辞めていった。

それに対して，オフィシャルダンスの代表，副代表をつとめるサヤカ（高2）とカオリ（高2）の加入のきっかけやコミットメントの度合い，進路観は対照的である。

2人は，同じ中学の出身で，当初地区児童館で練習をしていたが，職員の紹介でゆう杉並のダンス講座に参加し，その後オフィシャルダンスにも加わっている。

**職員「サヤカちゃんもカオリちゃんも児童館でいて，私のよく話したりする職員がいて，『やあ，こんな子いるんだけどねー，どうかなー』ってところからね，誘ったら，こんなんなったっていう感じでねえ」**

**筆者「もともとダンスやってたんですよね。児童館で」**

**職員「うん，だけど，同年齢の子とそんなに積極的につき合う子じゃないし。だけどそういう子たちとつき合わせたいんだよなーっていって，その職員の人が」**

**筆者「あんなに積極的だったわけじゃ？」**

**職員「ないんだよ。うーん」**

【2000.9.28　インタビュー】

カオリ自身も，「ゆう杉並に来て一番変わったこと」として開口一番「明るくなった」と答え，次のようにいう。

**「普段は，学校にいるときとか，家にいるときとか，誰かといるときとか，ほんとの自分かどうかわからないんだけど，とりあえずダンスやってるときは，自分が今ここにいるんだなって，自分の存在を確認できる場所だから。自分はここにいたいなって安心できる」**

【2000.9.28　インタビュー】

カオリは，ゆう杉並以外にも一人でダンス練習をするなど熱心だが，あとに紹介する男子メンバーとは異なり，ストリート系のダンスには興味をもたず，岩崎先生のジャズを中心としたダンスを喜んで受け入れている。2人は，進路についても迷いをもっており，高校3年生になって他のメンバーが辞めていくなかで最後までオフィシャルダンスに所属していた。

男子の4人は，女子とは異なるオフィシャルダンスへの距離のとり方をしている。彼らは，学校の先輩がテレビのダンス番組「レイブ2001」に出たことをきっかけにダンスをはじめ，ダンススクールに通い出した。そしてゆう杉並の存在を知り，オフィシャルダンスに入っている。彼らは，オフィシャルダンスとは別にLocksというチームをつくり自分たちで曲決め，振りつけ，練習をしている。Locksでは，ジャズが中心のオフィシャルチームとは異なり，ロック，ブレイクといったストリート系のダンスをしている。しかし，「ストリートは高校のうちは親がうるさい」というように，実際にはストリートやクラブでの活動はしていない。

ストリートを志向する彼らは，ジャズやアイドルグループの曲を中心とするオフィシャルダンスに対しては，一定の距離をとって見ることになる。

**「おれらはもっと，ストリートとかでやってるような，ほんとにああいうダンスがダンスだなって思うから，やっぱ発表会っていうか，学校とかでやるような部活でやるようなそういう感じかな。ここは」**

【2000.9.28　インタビュー】

しかし，ゆう杉並の環境のよさや講座のレベルの高さ，学校以外の場としての意義に対しては高い評価をしている。

**「講座は，ここにとっちゃすごい大事なんじゃないかなって，重要視してましたよ，俺は」**

**「友だち増えたし，すごいいい経験。部活のなかの空間しか見なかったから，外の空間見れたのすごいよかったし。やっぱいつもああいうのやってるとお客さんの側だったから，ああいうとこに立てたのがすごいいい経験でした」**

【2000.9.28　インタビュー】

ストリート系のダンスを志向しながら公的施設で活動する彼らは，ゆう杉並に対してアンビバレントな感覚をもっているのである。

(3)　オフィシャルダンスの活動サイクル
　　－「自由利用→ダンス講座→オフィシャルダンス→自主練習→ライブ」

メンバーは，オフィシャルダンスに入るとき，いきなり組織的なオフィシャルダンスの活動に加わるのではなく，ゆう杉並を自由利用で利用していて，あるいは学校の掲示板で見て，単発のダンス講座に参加し，その後オフィシャルダンスに参加している。

また，オフィシャルダンスに加入後は，月2回のオフィシャルの練習日にのみ練習をするのではなく，年に4，5回行われるライブに向けて自主練習を重ねていく。自主練習は，講師の主導性が強いオフィシャルの練習と異なり，自分たちのペースでゆったりと練習をする。

オフィシャルダンスの練習は，全体に講師の主導性や職員による支援はあるものの，個人がその活動が自分に合うものかどうかを，自由利用での接触や単発のダンス講座で確かめつつ，より組織性の強いオフィシャルチームに参加し，活動参加後も，学校の部活動のように組織力の強い活動とは異なり，大人の関与の少ないなかで，個人個人が自分のペースで参加するような形態がとられているのである。

**2．たまり場，練習場所としてゆう杉並を使う若者たち**

オフィシャルダンスのメンバーは，自由利用（自主練習），ダンス講座，オフィシャルダンス，ライブといった

ゆう杉並におけるダンス活動のすべてに関わっているが，ゆう杉並でダンスをしている若者は，彼らのように全般的な関わりをしている者だけではない。

鳥越（高１），武田（高３），山本（高１）の３人は，ときどき自由利用時間のホールでブレイクダンスの練習をしている。必ずしも真剣にやっているわけではなく，ブレイクダンスの回転系の大技を楽しみながら何となくやっているといった感じだ。鳥越が「講座とかは出ない。基本的に自分のやりたいときにやってるから」というように彼らは，ダンス講座にもオフィシャルダンスにも参加していない[7]。ダンスの練習はゆう杉並での自由利用か，ストリートでやっているという。まだクラブへのつながりはないが，ゆう杉並という公的施設での講座やライブよりもクラブへの志向が強いことがうかがえる。

**鳥越「（クラブの）イベントとかで踊ってみたいですね」**
**筆者「ここでライブやったことある？」**
**鳥越「ないっす。ここで出るのは興味ないっすね」**

【1999.11.17　筆者との会話】

**３．ライブの場としてゆう杉並を使う若者たち**

ダンス講座やオフィシャルダンスには出ることがないが，自由利用での練習場所とライブへの出演だけをするグループもいる。私立高校２年生の女子５人のチーム「ワイプアウト」である。彼女たちは，学校でダンス部をつくってダンスの練習をしているほか，ストリートでも練習をしている。リーダー格のイズミは，ダンススクールにも通い，本格的にダンスの道に進もうと考えている。彼女たちのダンスのジャンルは，ヒップホップ，クラブジャズなどで，振りつけはすべてイズミが作っている。

講座やオフィシャルダンスに参加しない理由については次のようにいう。

**「習いたいわけじゃなくて，ヒップホップだけじゃなくて，いろいろ踊りたいだけなんで」**

【1999.12.18　筆者との会話】

また，オフィシャルダンスの女子とは異なり，ストリートやクラブへの志向が強い。

**「（クラブに）行きたーい。…ダンスの先生に聞くと，クラブとか行けばコネなんか簡単に作れるよっていわれて。…あれ出たいよね。『レイブ2001』。毎週見てる」**

【1999.12.18　筆者との会話】

その後，実際にクラブのイベントに次々と出演している。このようにいう彼女たちは，アイドルの曲を含むジャズを中心として，講師の指導を受けながらダンスをするオフィシャルチームには距離を置いている。彼女たちは，必ずしもゆう杉並という施設に深くコミットするわけではなく，ゆう杉並におけるライブを１つのステップにして，他のイベントやクラブのショータイムを次々と探して出演していっているのである。

**４．ダンス講座のみに参加する者たち**

一方で，振りつけ講座や，ヒップホップ講座など単発のダンス講座にのみ参加する者もいる。「学校の掲示板に貼ってあって今日の講座知った」という高３の男子３人，学校のクラブでダンスをしているという私立中３の女子２人，「来年秋の文化祭に向けて」参加した高２の女子３人などである。

彼らは，講座に１回出るだけで終わることもあるし，継続的に講座に出て，次第にオフィシャルダンスや，ゆう杉並の他のイベントに参加することもある。担当職員は，こうした参加者に対して「だんだん慣れてくるでしょ」と話しかけるなど関係づくりにつとめ，彼らのニーズにより応えようとつとめている。そうしたはたらきかけのなかから，講座にのみ参加していた女子中学生のグループが，ゆう杉並でのライブに出演することもあった。

また職員は，参加を促すだけではない。講座を見学に来た中学生について「やりなってしつこくいうと嫌がるから。見てていいよって。中学生はなかなかダンスには入りにくいから」というように，無理に講座に勧誘するのではなく，その若者に合ったやり方での参加のし方を認めている。

以上のように，同じダンスをする若者であっても，それぞれのグループによって，ゆう杉並の利用の仕方が異なっていることがわかる。

オフィシャルダンスの若者たちは，ダンス講座，オフィシャルダンス，自主練習，ライブといったゆう杉並におけるダンス活動のすべてに関わっている。そのなかでも，ダンスの志向やコミットのし方に個人差があり，とくに男子は，ゆう杉並という公的施設での活動を中心としながらも，ストリート系のダンスを求めることでアンビバレントな思いを抱えている。

何となくたまりながら自分たちのやりたい範囲でダンスもするが，それ以上の深い関わりをもとうとはしない者，発表の場としてライブには出演するが，講座に参加せず，ゆう杉並での活動を自らのダンス活動の一ステップとして位置づけている者，また，ダンス講座にのみ参加したり，体育祭や文化祭のための練習場所として利用するグループ。

ダンスをする若者だけを見ても，ゆう杉並という施設においては，このような多様な若者が多様な関わり方で活動をしていることがわかる。しかし，ゆう杉並を利用する若者はダンスをする若者だけではない。バスケをする若者，自由利用を中心にする若者，バンドでのスタジ

オ利用を中心とする若者など…。彼らは，ダンスをする若者とは，また異なる背景をもち，異なる関わり方をしている。次にこうした若者を見ていくことにしよう。

### C．オフィシャルバスケのメンバー
### ―学校外への多様なニーズ

オフィシャルバスケの練習は月２回，メンバーは20名ほどで，毎回10～17，８人が集まる。軽くシュート練習をした後ほとんどの時間は試合形式で行う。多くの学校ではバスケットボール部があるにもかかわらず，なぜ学校以外の場にバスケをする場を求めているのだろうか。

#### １．学校のバスケ部に所属していない者たち

オフィシャルバスケに属する者のなかには，学校でバスケ部に所属していない者と所属する者とがいる。

石井は17才。中学卒業後アメリカに留学し帰国。現在は高校に通わずに，大検を受験する予定である。学校に通っていないため，バスケをできる場所をゆう杉並に見つけてオフィシャルバスケに参加している。

進藤は高校３年生。髪型をアフロにしている。中学時代に不登校になり，現在は全寮制高校に通っている。普段は参加できないが，長期の休みに実家に帰って来たときに参加している。大学に進学し体育会のバスケ部に入りたいという。

多村は，都立高校を中退し通信制高校に編入，現在３年生である。都立高校時には，バスケ部に入っていた。

高１の森中は，体育推薦のある高校バスケ部に入っていたが，ついていけずにバスケ部をやめた。その後，ゆう杉並の体育室で一人でバスケをしていて，そこで知り合ったメンバーに誘われてオフィシャルバスケに入るようになった。森中はいう。

**「ぼくがゆう杉に来たのは，バスケがあったから。部活きつくてやめちゃって，居場所ない状態だった。今はバスケやる友だちできて，居場所感じてる」**

【2000．3．19　ある委員会での発言】

以上の４人は，それぞれの理由で現在バスケ部に所属していない。しかし，バスケをどこかでやりたいと思い，ゆう杉並を見つけて来ているのである。

#### ２．学校のバスケ部にも所属している者たち

他方，ここにはバスケ部に所属しながらオフィシャルチームに入っている者も多い。そうした彼らは，口々に，部活よりも「こっちの方が楽しい」という。

**「こっちの方が楽しい。学校がつまんない。（オフィシャルバスケは）みんなうまいっすね。それとみんな仲いい。先輩とも。それが魅力。学校だと部活以外に遊びにいったりしないけど，ここだと泊まりにいったり。こっちの方が仲いい」**

**「中３の夏に引退して，バスケやるところ探してたら近くにあったから。こっちの方がおもしろい。行くとこの高校あんまり強くないから，こっちには来るけど，部活は入っておもしろくなかったらやめる」**

【2000．3．25　筆者との会話】

オフィシャルバスケの練習は，試合形式がほとんどで，学校の部活で行われているような練習らしい練習はしていない。しかしそれでもかなり高いレベルで，高校バスケ部のチームを圧倒しているほどである。学校とは異なる場所で，さまざまな背景をもった若者たちが，比較的自由な形態で，かつ高いレベルで練習を行っている。この点が，部活動とは異なるおもしろさなのかもしれない[8]。

以上のように，オフィシャルバスケには，さまざまな理由で学校外の場を求めている者がいる。こうしたことは，学校の部活動では満たされないニーズが，それぞれは個別的な事情であるにもかかわらず，全体としてはかなりの割合で存在していることを表している。しかも，ゆう杉並では，体育室の自由利用があるため，森中のようにはじめ一人でバスケをしに来て，そこで知り合った仲間に誘われてオフィシャルチームに入るというプロセスが可能であり，参加するための壁が低いといえる。

### D．個人利用者―職員を介した参加プロセス

講座やオフィシャルチームの活動，バンド活動など組織的な活動に参加しない者でも，体育室やロビーを自由利用することができるのもゆう杉並の大きな特徴である。ロビーでは，一人でただボーっとしていたり勉強している姿，２～３人で雑誌をみながらおしゃべりしている女子の姿，４～５人でマージャンやカードゲームをしている男子の姿が見られる。

#### １．つなげる若者，つなげる職員

体育室では，一人や少人数で来て，バスケのシュート練習をしている者の姿が多く見られる。そこで知り合った仲間と試合をすることもある。

体育室の職員はいう。

**「石井君，すごいバスケうまいんですけど，いろんな子引きこんでくれるんで。一人ずつでやってるとゴール足りないんですよ。でもそうやって引き入れてくれるとみんなでできるんで」。**

【2000．8．24　筆者との会話】

石井は前述したようにオフィシャルバスケのメンバーだが，バスケをする利用者だけでなく，後述の緒方のような自由利用を主とする者や中高生委員とも親しくしており，ゆう杉並のなかで顔が広い。石井のような人との関わりをうまく結べる者を介して，自由利用者たちがつ

ながっていくプロセスがある。

自由利用においては，職員の役割も重要である。個人利用を主としている町田（高３）はいう。

**「学校が私立で遠かったからここに来るときは一人だったのね。それで職員と仲良くなって，それから仲良くなった友だち多い。…職員の影響力大きいね」**

【2000.5.26　筆者との会話】

町田は一人でゆう杉並を訪れることが多く，筆者の観察でも体育室で小学生や職員とボール遊びをしていることが多かった。

体育室やロビーを観察していると，とくに組織的な活動に関わることをせずに，いつも一人や少人数で来て自由利用をしている常連がかなりの数いることがわかる。そうした若者たちに対して職員は，それぞれの者の思いやニーズに応える形で何気なく支援をしている。

このように，仲間をつくるのが上手な若者や，職員を通して，一人や少人数で来た自由利用者が，互いに結びついてこの場で活動しており，ときにはそれがきっかけになって，オフィシャルチームなどのより組織的な活動へ参加することもある。

**２．不登校の緒方の参加プロセス**

緒方（区立中３年）は，学校では「保健室登校」であるという。筆者の観察期間の初期は，筆者が来館する日に彼は必ずといってよいほどゆう杉並に来ており，ロビーや体育室で同じ中学の友人と一緒にいるか，一人で職員と話していることが多かった。職員も「緒方くん。毎日来てますね。…職員と遊んでますね。職員と遊ぶ子と遊ぶって感じで」といっている。そうこうするうちに彼は，他の個人利用者や中高生委員，オフィシャルバスケのメンバーなどのなかに徐々に知り合いを増やし，オフィシャルバドミントンに入っている。さらにある日，職員は，体育室にいた緒方に何気ない会話のなかで「コウイチ，中高生委員やらない？」と声をかけている。緒方は，それに対して，「やりたい！まじでぇ」と答え，高校進学とともに，友人と一緒に中高生委員になっている。

緒方の入ったオフィシャルバドミントンのなかには，もともとゆう杉並に一人か少人数で来て，ロビーや体育室の自由利用をしつつ，職員と親しくなり，チームに入った者が何人かいる。バドミントンをすることを目的とする者だけではなく，個人利用から組織的活動へ参加していく者のひとつのステップとして，このオフィシャルチームが機能しているともいえる。その意味で，特定の活動をする目的で集まってくる者が多いオフィシャルダンス，オフィシャルバスケとは異なる機能を担っているといえる。

**Ｅ．バンド活動**

**―「友だちの友だち」つながりと施設への違和感**

最も利用団体登録が多いのがバンドである。貸しスタジオは２時間で6000円が相場であるといわれ，支払い能力が制限される中高生のニーズが高いのもうなずける。

**１．「友だちの友だち」つながり**

バンドの活動というと，少人数で閉じたグループのように感じられるが，インタビューのなかではひとつのバンドに，学校が異なる者がいるのが通常であり，全員学校が別であるバンドも珍しくない。講座やライブ，ロビーでの出会いをきっかけにバンド間のさまざまな交流が行われていることがうかがわれる。バンドだけでなく，職員や中高生委員を通して，ダンスや他の活動をしている者と友だちになることも多い。ゆう杉並では，「友だちの友だち」というつながりが多様に生じうるのである。

**２．「ここは遊び」**

しかし，オフィシャルダンスの男子が，ゆう杉並に対して感じていたアンビバレントな評価は，ゆう杉並のスタジオを利用している若者のなかにも見られる。

**「ここは遊び。ただだし。ライブハウスでたくさんやる」**

【2000.3.26　筆者との会話】

このように無料でスタジオやホールを借りられるメリットを感じながらも，「ここは遊びだから」と，あえて金銭的負担のあるライブハウスで自らチケットを売りさばいて行うライブを重視する若者も少なくない。

また，貸しスタジオの場合とゆう杉並でやる場合の違いについて，次のようにいう者もいる。

**筆者「ゆうでやると制限とかある？」**

**「いろいろありますよ。まず機材がいたみすぎ，それと少ない。あと機材をいじれない。外のだとみんなで機材をねじはずしたりとか，いじるんですよ。でもゆうだとみんなで使うから。あと飲食禁止」**

【2000.9.6　筆者との会話】

彼は，当初ゆう杉並でスタジオを借りたり，ライブに出演していたが，その後むしろお金のかかる貸しスタジオやライブハウスに比重を置いた活動をしている。

そもそも既存の文化に対して距離を置くロックミュージックを志向する彼らにとって，安全に保護された公的施設はかっこ悪いもので，「ここは遊び」という一段下げた意味づけをせざるをえないものである。また，公的施設が彼らに要求する規則正しさも，彼らが既存の文化に対抗する根拠を失わせる。しかしまた，そうした彼らが，施設と距離をとりつつも，無料で使えることや多くの友人をつくることなど，自分たちのバンド活動のなかでこの場をうまく利用していることも確かなのである。

## Ⅳ 「居場所」型施設における若者の関わり方

### ―「多様な距離のとり方」と「漸次的参加」

### A．学校外への多様なニーズとやりたいことの追求

これまでのデータからいえることは第一に学校外の場におけるニーズがさまざまだということだ。ダンスをしてみたいが習うお金がない，バスケをやりたいがその場がない，バンドの練習をしたいが貸しスタジオが借りられないといったものから，何となくたまる場がほしいというものまで，ひとつひとつは個別の事情から出てきたもので，まとまった数字として出てくるものではないが，全体としてみると学校外の「居場所」へのニーズはかなりの割合で存在しているといってよい。

そこで彼らは「やりたいこと」を追求する。それは一見あたりまえに見えるが，十代の若者にとってやりたいことを追求することのできる場は少ない。「自分の存在を確認できる場」(オフィシャルダンスのカオリ)，「居場所感じてる」(オフィシャルバスケの森中) というように，学校外の「居場所」としてのゆう杉並は，やりたいことを追求し，それによって自己の存在を確認する場となっているのである。

### B．「多様な距離のとり方」

学校外へのさまざまなニーズは，多様な活動だけでなく，多様な活動形態を要求する。専門的な指導の受けられるダンス講座，レベルの高いバスケチーム，バンド練習のできる無料のスタジオ，ふらっと来ておしゃべりのできるスペース，一人で行ってもシュート練習のできる体育室，ライブのできるホール…。建設計画時，大人側は体育館や音楽活動は学校を利用すればいいという考え方だったが，それは正しくなかった。若者にとっては，運動や音楽活動ができる場があればいいというだけでなく，それがどのような形態で使えるかが重要なのだ。予約しなくても，少人数でも使える，行けば誰かがいる，夜遅くまで使える，そういった場を求めていたのである[9]。

こうした多様な活動形態を，若者たちはそれぞれの活動スタイルに合わせて活用する。同じダンスをする者でも多様な関わり方があった。それは，施設側のあり方に合わせるのではなく，若者の側に解釈主体性を残したままの関わり方[10]であるといえる。それゆえにこそ，オフィシャルダンスの男子やバンド活動する者など，公的施設に一定の違和感をもつ者も利用することが可能になっているのである。

### C．「漸次的参加」

ゆう杉並の若者の関わり方のもう一つの特徴は，自由利用を基礎として，そうした多様な活動形態を行き来しながら，次第により組織的な活動へと参加していくプロセスである。オフィシャルダンスのメンバーも，はじめから入ったわけではなく，自由利用や単発の講座で，この施設が自分に合うものかどうかを見極めながら，徐々に組織的なオフィシャルチームの活動に加わっている。また，不登校の緒方は，当初一人や少人数でロビーや体育室にたまりつつ，職員や他の利用者を介して知り合いを広げ，そののちオフィシャルチームの活動に加わり，最後には中高生委員にもなっている。バンドのメンバーは，講座やライブへの参加を通した「友だちの友だち」つながりによりネットワークを広げている。

従来の学校教育や社会教育の実践と比べた場合，従来のものが組織だった活動に参加するかしないかのいずれかで，するとしたらその活動がどのようなものかわからない段階で参加しなければならなかったのに対し，ゆう杉並における若者の関わり方は，自由利用や単発の講座によって，ゆう杉並の活動や雰囲気に周辺的に触れながら，それが自分に合うものかどうかを確認しつつ徐々に組織的な活動に参加していくものである。若者の集団活動離れが指摘され，社会教育の青年事業には若者が集まらないといわれている。しかし，彼らは組織的活動すべてを忌避しているわけではない。コミットしないのではなく，いきなりはしないだけである。このような，ある場や活動が自分に合うものかどうかを丁寧に吟味しながら，徐々に組織的な活動へと参加していくプロセスをここでは「漸次的参加」と呼びたい。

## Ⅴ おわりに

ゆう杉並を利用する若者たちは，学校外への多様なニーズにもとづいて，「多様な距離のとり方」で，「漸次的参加」ともいえる関わり方をしていた。それは，言い換えれば，解釈主体性を自己に保持したままの関わり方であるともいえよう。このような関わり方を可能にする「居場所づくり」が，多数で多様の若者の利用を得ている主要な要因となっているのであろう。今後は，このような居場所をささえる職員の支援のあり方の特質を明らかにする必要がある。また，ゆう杉並は「中・高校生運営委員会」という若者の参画の仕組みを取り入れている施設でもある。「居場所づくり」に対する「参画」の果たす機能を解明していくことも求められる。

しかし，いくら多数であっても施設で活動する若者は一部にすぎない。ゆう杉並周辺のフィールドワークにおいては，意識的に公的施設を避けて活動しているグルー

プも見られた。彼らはどこをどのように居場所としているのか，なぜ大人による支援を避けるのか，そうした彼らの抱える問題は何なのかを明らかにする必要がある。さらに，若者のうちの「誰が」という点が重要である。公的に「居場所」を作ったときにそこに誰が来て，誰が来ていないのか，「参画」の仕組みを取り入れたとき，それは誰にとって利益となり，誰にとってそうではないのか，こうした点はこれまでの「居場所」研究，社会教育における子ども・若者研究において充分に扱われてきたとはいえない。

施設に来ない者も含めた学校外空間の構造，学校外の「居場所」が果たしている社会的機能を明らかにしていくことが今後の課題である。

**註**

1）雑誌における特集としては，

「子どもの居場所づくり」『教育』第43巻第4号，1993年

「学校の子どもの居場所・遊び場所」『教育と施設』第63号，1998年

「子どもの居場所と住まい」『建築とまちづくり』第259号，1998年

「子育てネットワークと『居場所』づくり」『月刊社会教育』第42号第3巻，1998年

「2学期，子どもの居場所をどうつくるか」『総合教育技術』第53号第8巻，1998年

「子どもと“居場所”」『子ども家庭福祉情報』第15号，1999年

「子どもたちの放課後の居場所」『子どものしあわせ』第587号，2000年

「第14回日本精神保健会議　子どもたちは今，こころの居場所を求めて―フォーラム」『心と社会』第31巻第2号，2000年

「子どもの居場所」『建築雑誌』第116号，2001年

などがある。これらはほとんど90年代後半以降のものである。

2）例えばゆう杉並は，その目標の第一に「居場所としての役割」を掲げている。それは，「目的をもった活動を行うわけではなく，友だちとおしゃべりをしたり，その場の状況に応じて，仲間との交流や一人の時間を楽し」む来館者への対応であり，具体的には，自由利用の時間を確保したり，来館者の要望に臨機応変に応えることであるとされている(「平成10年度事業報告」)。

3）ゆう杉並ではとくに役割は与えられず，「研究生」という名札をつけてフィールドワークを行った。当初メモを持って話しながら会話を記録したが，講座に参加するなど親しくなるにつれて、会話中に記録せず，後に別の場所で行うようにした。また，フィールドワーク期間の終わりには，オフィシャルダンスの男子2名，女子2名，「舞台・映像」担当職員1名を対象にそれぞれ2時間ほどの録音を伴うインタビューを行った。なお，プライバシー保護のため登場する人物名，グループ名はすべて仮名とし，個人が特定されないように性別等事実を一部修正している。

4）1日平均利用者は約220人，そのうち約6割が中高生である。定行・松木（1999）によれば，周辺に居住する中高生の84％がゆう杉並の存在を認知し，66％が利用経験をもっていた。筆者の観察の結果からも，ゆう杉並には従来の青少年施設が対象としてこなかった多様な層の利用があることがわかった。

5）「中高生タイム」とは，児童館に集まってくる中高生のために，開館時間の延長や優先利用できる時間帯の設置によって独自の事業を行うものである。

6）金丸ほか（2000）は，ゆう杉並を他の中高生施設と比較し，「プログラム＋居場所提供型」と位置づけている。

7）しかし，そのようにいう彼らもその後ブレイクダンス講座に参加していた。それは，ニーズを嗅ぎとって何気なく声かけをする職員の支援が介在してのことである。

8）レベルの高さから練習についていけずにやめていく者も当然いる。こうした状況に対して，職員はオフィシャルバスケを「ビギナー」と「エキスパート」に分けて，練習日を変えることにした。幅広い層の利用を重視する職員の考え方の表れであるといえよう。

9）渡海ほか（2001）は，ゆう杉並利用者へのヒアリングから，利用動機(「ふらっと立ち寄る場所」，「予約して使う場所」，「決められた時間に行く場所」，「予定を立ててから行く場所」のうち複数回答）が多様であることを示している。この事実は，多様な利用形態，多様な距離のとり方と重なるものと理解できる。

10）岩見（1985）は，マス・メディアの情報を個人が送り手ではなく自分のコード体系によって解読を試みるとき，解釈主体性が発揮されるとする。本稿では，施設や活動を提供する大人側ではなく，利用者たる若者がそれらを自由に解釈し利用できることを「解釈主体性」と呼ぶ。

**参考文献**


井田晴彦ほか　2001「居場所としての公園」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

岩見和彦　1985「マス・メディアと青少年」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社

沖田寛子　1997「不登校現象と子どもの『居場所』」『山口大学文学会志』第48巻

金丸まや　1999「中高生を対象とする施設に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』

金丸まやほか　2000「中高生対象施設の利用実態に関する研究」『日本建築学会東海支部研究報告集』

定行まり子・松木要詩子　1999「中高生の居場所からみた地域施設の利用実態と要求について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』

佐藤一子　1998「地域社会における子どもの居場所づくり」佐伯胖ほか編『ゆらぐ家族と地域』岩波書店

澤田英三ほか　2001「居場所としての駄菓子屋」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

志水宏吉　1998「教育研究におけるエスノグラフィーの可能性」同編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院

鈴木智子・中野明徳　2000「学校空間と心の居場所」『福島大学教育実践研究紀要』第39号

住田正樹ほか　2001『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

住田正樹　2001a「子どもたちの居場所と対人的世界」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

住田正樹　2001b「子どもの居場所と対人的関係」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

芹沢俊介　2000「居場所について」藤竹暁編『現代人の居場所』至文堂

田中治彦編　2001『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房

田中治彦　2001a「関わりの場としての『居場所』の構想」同編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房

田中治彦　2001b「子ども・若者の変容と社会教育の課題」同編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房

東京シューレ編　2000『フリースクールとはなにか』教育資料出版会

渡海裕司ほか　2001「中高生のための施設とその利用実態に関する研究」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

富永幹人・北山修　2001「青年期の『居場所』」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書

鳥山敏子　1997『居場所のない子どもたち』岩波書店

萩原建次郎　1997「若者にとっての『居場所』の意味」『日本社会教育学会紀要』第33号

萩原建次郎　2001「子ども・若者の居場所の条件」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房

久田邦明　1997「青少年施設の現状と可能性」『湘南短期大学紀要』第８号

久田邦明編　2000『子どもと若者の居場所』萌文社

久田邦明　2000「子どもと若者の居場所」同編『子どもと若者の居場所』萌文社

藤竹暁編　2000『現代人の居場所』至文堂

本田和子　1999「変貌する子ども世界の今」『子ども家庭福祉情報』第15号

松木要詩子・定行まり子　2000「児童青少年センター『ゆう杉並』の利用実態と中高生の地域施設要求について」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』第６号

水月昭道ほか　2001「下校時の帰宅路に見られる子どもの遊び行為とみち環境との関係」住田正樹ほか『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』平成10－12年度科学研究費補助金報告書